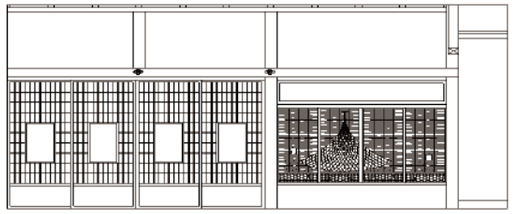
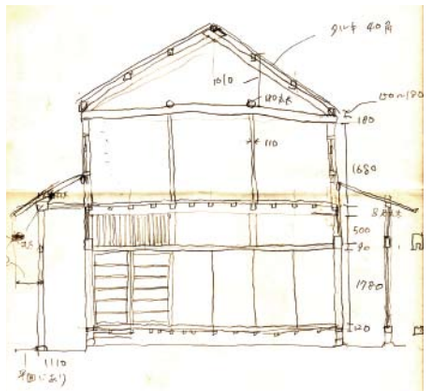
柳窪実測調査

鈴木賢次研究室　NPO法人 東久留米の水と景観を守る会

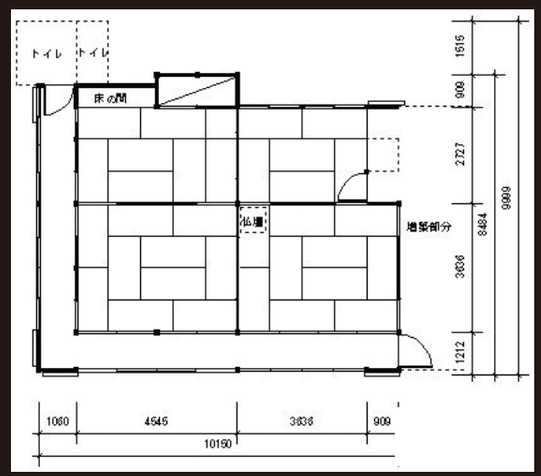
-柳窪実測調査-

NPO法人東久留米の水と景観を守る会の依頼により、東京都東久留米市にある柳窪集落の実測調査を行った。当地は江戸時代・明治時代の民家と周辺の環境がよく残っており、本調査によって歴史的文化遺産を保全するための基礎資料の作成が主な目的である。





奥住実宅断面図



野崎正太郎宅平面図一部

-柳窪集落-

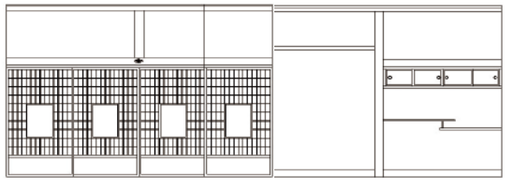
現在の柳窪は旧柳窪村に始まる。江戸時代に黒目川の水源地を中心として開発され、寛文十年（1670）に幕府領（天領）となった。柳窪村の開発は黒目側を水資源とし、村の社である天神社の宮前に屋敷を構えた村野家を中心として近在の野崎家、奥住家、内田家などの旧家が深く関わってきた。水利の悪く水田のできないこの地域は小麦をはじめとする様々な作物を作り、また養蚕業を通して発展してきた。

現在では江戸時代の後期から昭和初期までの民家が現存しており江戸時代から明治の急激な時代の移り変わりの中で民家がどのように変わってきたかを理解することができる生き証人として貴重な集落である。

柳窪集落の屋敷林

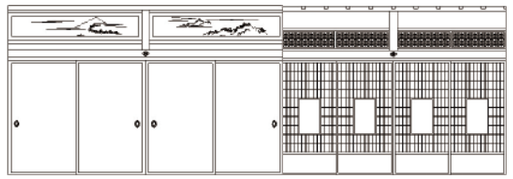
-屋敷林-

柳窪の各農家は、ケヤキ、シラカシ、スギなどの屋敷林に囲まれている。屋敷林は四季を通じて季節風や火災時の火の粉から家屋を守る防風林・防火林としての役目と同時にその家の格式を重んじたものと言われ、代々大切にされてきた。まとまった屋敷林、1.36ｈａが東京都の「柳窪緑地保全地域」として保存の対象になっている。この地域には、保存樹木としてだいじにされている樹木約190本があり東久留米市内の35%に達している。



-柳窪囃子-

古谷重松という人物が江戸の祭囃子を参考にして独自の旋律を考案編曲したものであり重松流とよばれ、現在も柳窪住民の手によって継承されている。柳窪天神社の春祭と秋祭に奉納される。

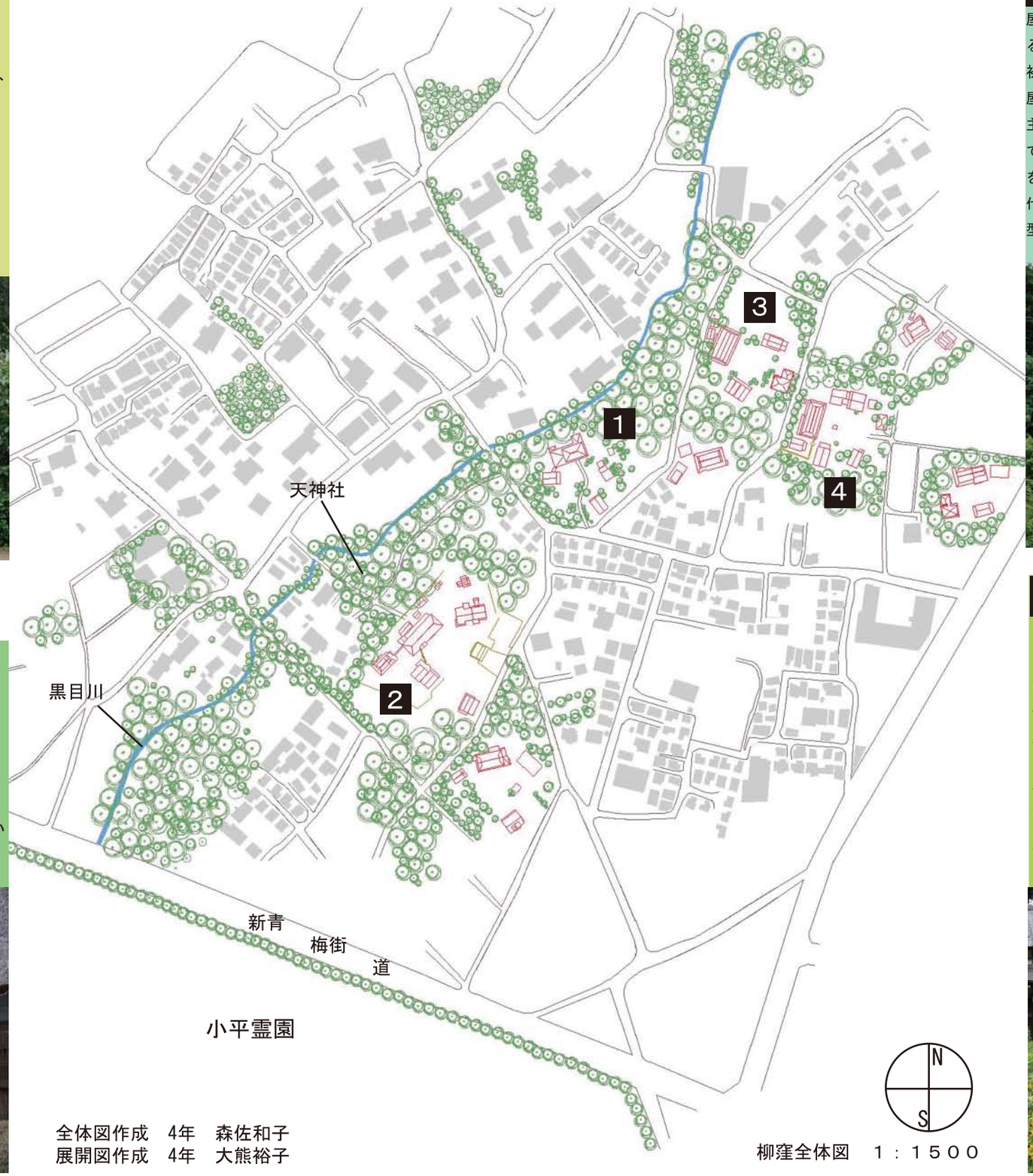


1 村野成美宅

黒目川に渡された天神橋のたもとにこの家があるため、屋号を橋端と呼んでいた。
現在主屋の外観は改装され新しいもののように見えるが、内部の構造材は旧状をよくとどめている。
主屋の建立は明治九年で、明治初期の典型的な六つ間取り。入口には、大戸が二つあり、「ざしき」寄りの大戸は玄関として使われ、もう一つは「だいどころ」へ入る日常用のものであった。「ざしき」寄りの大戸のまわりは格子戸などで仕切られていて、このような使い方はやはり江戸時代にはなかった。

2 村野啓一郎宅

旧柳窪村の村社、天神社の東にある家で、欅の屋敷に囲まれた佇まいは、江戸時代から明治の初期の景観をよく残している。
屋敷の入口には欅作りの薬医門があり、主屋の左手に土蔵、その奥に和洋折衷の隠居部屋が主屋とつながっている。主屋の建立は墨書によると、天保九年で六つ間取り「げんかん」と呼ばれる「なかのま」には式台が付いている。



全体図作成　4年　森佐和子
展開図作成　4年　大熊裕子

柳窪全体図　１：１５００

3 奥住仁一郎

屋号の宇兵衛は、当家初代の名で、明治九年に没しているので、当家が独立して居を構えたのは江戸末から明治初期頃のことと思われる。
屋敷は、主屋と二つの土蔵、裏手に稲荷が祀られている。主屋は二階建てで、小屋組を和小屋に改め、瓦葺きにしている。間取りは六つ間取りで、座敷まわり全てに内縁をめぐらしている。この家が建てられた年代は明治十年代と推定される。明治初期の養蚕農家の住居の一つの典型を示した好例である。

4 野崎市郎宅

主屋は明治九年に建てられた村野成美宅の主屋を手本としてその二、三年後に建てられたと云われ、様々な箇所に類似点がみられる。
昔は二階の上に更に二層の小屋裏が作られ、養蚕に使われていたようである、間取りは六つ間取りを基本とした多室間取りで、大黒柱と恵比寿大黒が室内に相対して配置されているが、その径はそれぞれ４５㎝、３０㎝と巨大である。それ以外にも明治初期の養蚕による豊かな経済力は、ふすまに張られた書や、水墨画などに表れており、文人や画人との交流があったことが推察される。

RESEARCH